
私にチャンスをください

憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私にチャンスをください

【Nコード】

N0500W

【作者名】

憂

【あらすじ】

妹のせいで、歪んだ性格

親に認められなくて努力して得た物は、全て妹に崩される

拳句に妹に殺され、異世界へ転生

愛を常を感じる為にこの世界で頑張ります

《1》 平等ってなんですか？

私が3歳の時に妹は産まれた。

母達は、たつぷりと妹に愛情を注いだ。

その時から、私への愛情が薄らいでいった。

妹には、沢山の物を与えるのに、私にはいつもその半分も与えられなかった。

お菓子、服、おもちゃ……どれを欲しがっても、買ってくれない癖に妹がほしがあると、なんでも買い与えた。

なんで、萌^{もえ}には買ってあげるのに、私には買ってくれないの？ と、そう聞いた時は、いつも『歩^{あゆむ}はお姉ちゃんなのだから、我慢しなさい』と答えた。

子供だから、そんなの言われたって納得がいかず、度々喚いた。

それでも何一つ変わらなかった。

それを面白く無いと思った私は、妹を妬む様になった。

小学校3年生の頃、どうしても欲しい物を買うために、母の財布から千円札を3枚抜き取った。

私は段々と、自分が何を言おうが母は聞いてくれない、とわかり始めていたからだ。

欲しかった物を買ひ、左手に握りしめて玄関に入ると、財布を片手に持った母がいた。

母はいきなり私にビンタをして怒り始めた。

小石が転がる玄関に座らされて、1時間近く怒鳴り散らかされた。

そして、私の腕を強く引き家の外にある物置に、私を一晩閉じ込めた。

中は真っ暗でひんやりとしていて、無性に怖かった。

いくら泣きわめこうが、誰も気付いてくれなかった。

田舎にある我が家は、ご近所さんといえども300mぐらい離れていたため、当然だった。

秋だったお陰で、軽い脱水症状で済んだ。

それから、どう母の機嫌を悪くしないかで一生懸命だった。父は、私に一つも関心がなくなったようだ。

初めて母の家事の手伝いをして、とても褒められた。

ただ、ただ、嬉しかった。

何度も褒められたくなり、沢山家事を手伝った。

けど、私が中学校1年生の頃、妹も手伝う様になり私がしていた全てをする様になった。

私はする事がなくなり、どうしよう、と困惑した。

そんな時に初めての中間テストがあった。

結果、五教科合計で453点だった。

それを、母達に話すと、当たり前前で喜ぶなと言われた。

私は母達を喜ばせるぐらいの点数を取るためにたくさん勉強をした。おかげで、ほぼ満点に近い点数をとれた。

その時は、多分だけ喜んでくれた。

私が、2年生へと進学し、中間テストがあった。

私は五教科合計で487点で、妹は265点だった。

この事で、妹は怒られるだろうと楽しみにしていた。

だが、怒られるどころか”天才だ”と母達に褒められていた。

途端に、胸の中に何か重いようなモヤモヤが籠った。

なんでこんなにも平等じゃないのだろうか？ そんな事ばかり考えてしまう。

その日は、一日中自分の部屋で声が漏れない様に泣いた。

夏休みに突入し、蟬達が馬鹿の様に鳴いているな、と考えていると1階から母の怒声が聞こえた。

『8万円をどこにやったの、歩!？』と。

私はなんの事か分からず、ただ、ただすみませんと言いつけた。

母は私に暴力をふるおうと、手を上げた時に妹が自分がやったと言った。

すると、母は豹変し、何に使ったかも聞かず、もうしないでね、とだけ言って終わった。

頭の中が真っ白になった。そして、他の事を考えられないぐらいに怒りが沸いた。

これまで溜めていた鬱憤を初めて妹にぶつけた。

当然、私と妹の中には犬猿の仲の様なものだったため妹はキレて、お前なんて元々要らないんだよ、と言い包丁を持ってまっすぐ私に突っ込んできた。

突然の事に反応できず、腹に深く刺さり、勢いで床に倒れた。

体から、暖かい物が抜けて行く感覚と痛みを感じた。

妹は壊れたかの様に笑いながら、私に乗りかかかり包丁を抜いて刺してを繰り返す。

その度に痛みを感じて体が痙攣したかの様に跳ねる。

段々と痛みを感じなくなり、私の血にまみれた包丁を振りかざしている妹を最後に目の前が暗くなっていく。

そして、私は気を失った。

もし、生まれ変わるなら愛で溢れている家庭に生まれるチャンスを与えてください

????????????????????
????????????????????
????????????????????

『んー。なんでこの子は、こんなにも悲惨な人生なんだ？
もしかして、俺のミスでこうなったのかも・・・』

『済まないけど、適当に能力与えて、違う世界に転生してもらおう。
俺のミスが上司にばれたら減給だからな』

『よしっ、能力も与えたしさっさと転生してもらおう。
あ、ルーちゃん！ この魂をオーの輪廻の輪に突っ込んでいてくれ
ー』

『了く解』

なんか変な色の魂ですね。

まあ、私には関係無いですけどね。

よしっ、ここにセットして、スイッチオン！

それでは、新たな人生を楽しんでください！

《2》 どうですか？

暖かい

私の最初で最後の家族旅行で行った温泉に、包まれているようだった。

そういえば、私は妹に殺されたのでは？

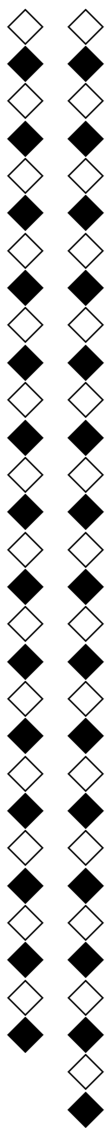
そう考えていると、いきなり周りの水が動き出して、柔らかいパイプに頭が突っ込む。

そして、開かない瞼から光を感じた。

無意識に出る私の鳴き声と、女と思われる人に抱かれながら、元気な男の子です、と言う声が聞こえる。

ああ、私は赤ちゃんになったんだ。

急に眠気が私を襲いそのまま眠りについた。



「良かった、本当に良かった・・・良く頑張ったよ、理沙。こんなにも元気な男の子が生まれてきて、僕、発狂して喜びたいぐらいだよ」

興奮して唾を飛ばす勢いで話しかけてくる夫。

「発狂はやめてくださいね、あなた。ねえ、この子の名前決まった？」

「おう！ちゃんと決めてきたよ。僕は最初から男の子が生まれると思っていたから、ぴったしだと思うよ」

「女の子だったら、どうするつもりだったのよ……はあ」

「その時はその時さ。とりあえず発表するよ」

ふ、不安だわ……

「ええ、おかしいものでしたら私が決めますからね」

「だ、大丈夫だよきっと。で、名前は瑞希みずきでどうだい？」

「それだったらいいわね。よしっ、このときからあなたは瑞希よ。
やさしい子に育ってね」

「あ、僕にも抱っこさせてよ」

「ダメよ、寝てるんだから」

「うー」

床に、這い蹲るような体勢

「あんた、大人になって何してるのよ」

「だ、だって理沙が意地悪するから」

「意地悪していません。この子が起きたときに抱っこしなさい」

「うん……」

「あ、林檎食べたいから剥いてよ」

「うん！待っててね」

急いで果物ナイフを棚から探す夫

やさしい子になりますように、そう願いながら私は瑞希を撫でた。

《3》 僕、瑞希に嫌われていないよね!?

5年前から、僕の人生はより喜びに満ちている。愛しい妻と、一緒に生きていける事に、これ以上の幸せは無いんだと思うっていた。だから、子供なんて別に欲しいとかそういう願望は無かった。

けど、理沙はあなたと私の愛の証が欲しいと、常に言うから、何時の間にか感化され、子供を作っていた。それから、時間が過ぎ彼女が突然吐き気を訴えるから、妊娠したのかと一瞬考えたが、医者を呼ぶ事の方が大事だと思い、救急車を呼んだ。理沙の『大丈夫よ』

という言葉が耳に入らず、そのまま病院に運ばれた。結果、本当に妊娠だった。理沙は大喜びするが、僕は何も感じない。こういう時、他の人はどう感じるんだろうと思いつながら、その日は終わった。時間が経つ度に、大きくなる理沙のお腹に、知らず知らずに愛情が沸いた。大きくなる度に、愛情も膨れていき、無事に産まれて来る時をひたすら願う様になった。

そして、待ちに待ったその時が来た。分娩室で、額に油汗を滲ませながら必死に力む理沙を見て、自分は何もできない事に気付いて無性に悔しくて、情けなくて辛いと感じてしまった。僕なんかよりも理沙の方が辛いに決まっているのに・・・

無意味かも知れないけど、理沙の手を包むように握った。

何時間か経った所で、僕と理沙の愛の証が、僕たちの世界に来てくれた。

喜びに満ちた顔の理沙と赤ちゃんが、今まで感じた事の無い愛しさが沸きだった。

????????????????????????????????????
????????????????????????????????????

うーむ、僕たちは息子に嫌われているのだろうか?

何故かいつも遠慮されている様な気がする。

何で？ え 本当にナンデ？

話し始めるのも他の子よりもずっと早いし、僕たちが使う様な口調で話す。

初めて喋った言葉が、「お母さん・・・？」だし。

まあ、舌足らずで可愛かったけど。

しかも、僕よりも敬語がうまい。

羨ましいッ！ とても羨ましいッ！

いや、そんな事よりどうしたら良いんだろう？

ちーちゃんパパに相談だッ！

結果、延々と続くちーちゃんの自慢を聞いた。

うちの瑞希も、負けないぐらい可愛いやいっ！

特に何も得られなかったので、話し合うという事になった。

あんなにも敬語を話せるなら、きっと話し合える筈だから。

「み、瑞希は僕たちが嫌いなのかな？」

答えを聞くのが堪らなく恐くなる。

「いいえ、嫌いではありません」

ホッとしたけど、何か含みのある回答が気になる。

「す、好きでも無いって事かしら？」

僕と一緒にみたいで、恐くて言うのをためらいがちになる理沙の手を握る。

「そう言う訳ではありません」

どう言う事かよく分からないことに、何故か焦りを感じた。

「じゃあ、何でいつも遠慮しているのかな？ 訳を聞かせて欲しいんだ」

言った途端に暗くなる瑞希の表情に、言った事に後悔する。少しの間無言状態が続き、理沙の表情が強張る。

瑞希が決心した様に顔を表にあげて、口を開いた。

「僕を嫌いになって欲しくないから。もう、嫌われるのは嫌だから・・・あんな思い・・・もうしたくないッ・・・だから、だから・・・良い子でいるから・・・いるから・・・」

瑞希の気持ちを知れて嬉しい筈なのに、素直に喜べない。『あんな思い』が何なのかわからない。なんでこの子が、こんなにも苦しんでいるのか、その事を知るよりも、瑞希に分からせない。と、思った。

「瑞希は何もわかってないッ！子供に困らされるのが親の仕事の一つなんだッ！子供なんだから大人の顔色を伺うなッ！僕達は何があっても瑞希を嫌いになんてなる訳無いだろッ！」

「そうよッ！瑞希は私がお腹を痛めて産んだ子よッ！例えば、瑞希に嫌われたって、嫌いになんかならないわよッ！」

スッキリした。けど、起こりすぎたのか瑞希が無いている。こけても泣かないような子が。赤ちゃん以来だ。だから、どうしたらいいか分からない。

あたふたするの僕たち。とりあえず、泣き止むまで抱いておこう。
きっと、隠している事があるんだろうけど、この子が話すまで待つ
ておこう。

《4》 現実ですよね？ (前書き)

おひさしぶりです

《4》 現実ですよね？

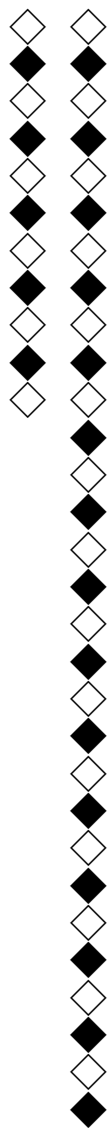
父さんと母さんは、僕が忘れた愛情を思い出させてくれた。
何事にも遠慮していた僕に、怒ってくれた。

『私』の頃の両親とは違い、自分が愛されているとはっきり分から
された。

嬉しかった。無意識に涙が溜まり泣いてしまった。

怒りすぎたとあわてる二人に抱きしめられた途端、心にあった黒い
モヤモヤは晴れた。

その時、初めて感謝した『神様』に……………



「瑞希ー、ちーちゃんママに用事あるからお家に行こうと思ってる
んだけど、行くー？」

母さん、僕、寝起きですよ……。でも、ちーちゃんには会いたい。

「行くー、行くから待ってー」

あれから徐々に口調が幼くなってきた。まあ、前の『私』よりはいい
のかもしれない。

とりあえず急がなきゃね。パジャマを脱ぎながら、ベッドから降り、
ベッドの引き出しから先週買って貰った水色と白のマーブルのズボ
ンと、白黒の縞模様のシャツを着る。5歳の体では、服を着るのも
大変だ。

「あー、瑞希。ご飯食べてから行くから急がなくてもいいよー」

早く言って欲しかったです・・・母さん。

黒の靴下を履いて、洗面所に向かう。

台を引きずって、台に乗り蛇口のレバーを引く。

春だから、まだ冷たい。

顔をタオルで拭いて母さんと呼ぶ。

まだ、うまく歯磨きができないんです・・・

「母さんー歯磨き手伝ってー」

「わかったわー」

あ、今お気に入りの歯磨き粉はレモン味です。

「ほら、その椅子に座って」

台の横井置いてある水色のパイプ椅子に座る。

座ると同時に間の抜けた音が出る。そうです、子供用の可愛い椅子です。

結構懂れていました。座ったことがないので。

黄色歯磨き粉を乗せた歯ブラシを、母さんに渡す

「よし、ほら、口をあけてー。あーん」

口に歯ブラシが入り、レモンの味が広がる。

うまい、いや、飲んでないよ。飲んでみたい気もするけど・・・うーむ。お母さんの腕は、ピカイチだと思う。

だって、気持ちがいいんだもの。

睡魔がやってきた。眠りたくないけど、体が5歳だ、いつの間にか
瞼が閉じ意識が朦朧としてきた。
勝てない。もう諦めよう。母さんに身を任せそのまま寝てしまった。



《4》 現実ですよね？（後書き）

すごく短い、けど、これが限界でした・・・
これから、また更新できるのでよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500w/>

私にチャンスをください

2011年11月11日23時57分発行